Veritas No.34(2007.3.15)

目次　　（敬称略）

＜『NANA』と『ナナ』の話＞
浜下　昌宏（図書館長）

＜私の“古典”＞
井坂　沙織
岸　　邦香
小松　さくら
中垣　美知代
羽手村　紗織
矢野　梓
稲本　好美
谷　　優似子
西山　真未
山脇　野枝

＜わたしと図書館＞
劉　小柵

＜研究室から＞
高橋　雅人

＜お薦めサイト紹介＞
　　櫻木　幸子

＜ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション（7）＞
　　松村 昌家

＜史料室から＞
　　佐伯　裕加恵

＜図書館活動記録＞
　　図書館

無断転載を禁ず

＜『NANA』と『ナナ』の話＞

浜下　昌宏　図書館長　総合文化学科教授

私の最近の心境は、梅堯臣（1002-1060）の言う「世事都厭聞　読書未忍退」（世事すべて聞くに厭きたれど読書（＝学問）未だ退くに忍びず）（世の中の事は皆聞きあきてしまったが、学問だけはまだ退歩させるにしのびない）［筧文生訳、『中国詩人選集二集３』岩波書店］と同じである。それにしても読書人の姿が褪せ、若者に読書の習慣が身に付かないのはなぜだろうか、と思う。インターネットやケータイの普及ばかりが理由ではあるまい。

先日、ある会議でひとつの問題をめぐって議論が興った。私のような文弱の徒の意見に反対して一群の体育系・活動家系の方々が熱弁をふるう姿を見ながら、私は森有正のことばを思い出していた。「体験は群れをつくり徒党を組む方向に向かうが、経験は孤独な個人をつくり出す」（「遥かなノートル・ダム」）。たしかに体を動かしてパフォーマンスを好む人は”仲良しクラブ“（安倍内閣のように？）を作り徒党を組んで作戦会議でも開くのであろうが、机に向かって読書する者は、書籍からの感動は深くても孤独であろう。孤独を恐れる者は読書を嫌う。またブルックハルト言うごとく（『世界史的考察』）、グーテンベルクの印刷術発明によって各人が一冊ずつ本を手にすることが出来、密室で沈黙のうちに読書することが可能になった。だから、孤立を恐れぬ者だけが読書の快楽を味わうとすれば、多くの大衆は孤独を恐れ、したがって読書から遠のくのだろう。これが読書人衰退の一因。

第２の（ありふれた）理由は、ヴィジュアル文化全盛時代ゆえの活字離れである。”わかりやすい授業“と称して AV 機器を多用する。久しぶりに本学を訪れたある卒業生は、授業中の校舎内を歩いたところ、どの教室にも暗幕がかかっていて暗い気持ちになった、と語った。たしかに画像・映像は集中心の欠けた学生向きであり、おしゃべり防止には効果的である。

昨年７月のチュニス会議（VERITAS 33 所載の拙文参照）で私が話したのは、日本製 MANGA と ANIME が世界を席捲している現代、そうしたジャンルは文明論・文化論・芸術論ではふつうロウ・アート（俗悪芸術）、ポップ・カルチャー（大衆文化）として低く評価されるのが常であるが、日本の美術史を回顧すると絵巻物や浮世絵、北斎漫画といった作品の歴史はその延長上にマンガやアニメを持ったのではないか、そして中国や西欧と違い、画論の軽視、ひいては江戸時代の国学者を代表例とする、漢学的言論説や多弁への忌避もまた日本文化のひとつの底流をなしているのではないか、という仮説であった。その発表では、一人前に（？）「パワーポイント」を使ってマンガの例として NANA などを映し出したところ、聴衆のうちそれを知らなかったのは皆無であった。NANA は世界中で翻

訳されて 2000 万部以上を売っているという。私の発表を聞きに来てくれたのはむろん多国籍で、アメリカはいうに及ばずタイ、オーストラリア、南アフリカその他の国々からの参加者であった。あらためて日本の MANGA の威力をみせつけられた。

じつは、NANA について私が初めて知ったのは２年前の３年専攻ゼミにおいてであり、ある日の研究報告者が「ナナ」について話すというので私は驚いて、今日ゾラなどを読むとは渋いなあ、と言ったところ、それはたいへんな誤解で、彼女が取り上げたのはマンガのヒット作の NANA であり、ゼミ生 15 人のうち NANA を知らなかったのは私一人であった。（その日の帰り、私は西宮北口駅構内の本屋に立ち寄り、店員に当の NANA 第 1 巻を取り出してきてもらい、恥を忍んで（？）さっそく買い求めた。ざっと見て、いまは研究室のどこかに放り出してある。）

世の流行（はや）りに疎い私の無知もおどろくべきかも知れないが、本年度後期「美学」のレポートにゾラの『ナナ』を主題に立派なレポートを提出する受講生がいたのも驚きだった。むろん、私は感激した。この３月に卒業予定のＳさんのレポートがそれである。私が授業で上記のような NANA についての思い出話をして、レポートの課題として「授業において取り上げられたトピックを何であれ自由に選ぶ」を伝えたところ、Ｓさんは「授業では名前を出されただけですがフロイトや美学的距離など授業と共通する点があると考えたため」とゾラの『ナナ』を選んだ理由について書く。「人間の美醜、現代社会に潜む病理が描かれ、人間の尊厳が問われている。19 世紀のゾラは私たちに生きるヒントを教えてくれる」、と。NANA と『ナナ』が本学でいつまでも共存することを願うばかりである。（そういえば昔のゼミ生で名前をたしか「奈々」と呼ぶ学生がいて、彼女は在学中に”ホームレス”とお友達になったなどと言っていたが、卒業してスチュワーデスになったと聞く。）

さて、かつて本学の先生で今は大阪大学でフランス文学を教えておられるＫ先生はたいへんな philobiblon(書痴狂)で、ご自宅の書棚には皮装の古書がみごとに並んでいるのだが、私の阪大出講時によく道ですれ違い、わずかでも言葉を交わすことが多い。先日も石橋でお会いすると私の下げていた包みをごらんになって「いつもなにか本を持ってはりますね」と声をかけてくれ、「立派や」とホメてくださったのだが、私は「いえ、ただのビョーキです」とだけ答えた。読書人が必ずしも教養人とはかぎらない・・・それはまた別の問題である。

＜私の“古典”＞

井坂　沙織　文学研究科比較文化学専攻

『きけわだつみのこえ－日本戦没学生の手記－』

副題を見てわかりますように、この本には戦没した学生の手記が収められています。言論統制の網の目をくぐり抜けたこれらの手記には、軍国主義を迎合する精神や血なまぐさい戦況の描写よりも、死を前にした学生達の、学問に対する純真な思いと学問で得た喜びに支えられている生の姿とが、平和な世を願う想いと共に綴られています。彼らの澄んだ知性と世の風潮に対峙しようとする強靭な精神が、読む者の心を打つように思われます。
この本は、私にとって学問とは何であるかという事を根本的に考え直す手掛かりを与えてくれるばかりでなく、私達に本当に必要なものは何であるかという事にも目を向けさせてくれると思います。

岸　邦香　文学研究科比較文化学専攻

アウグスティノス著　『告白』

私の“古典”（立ち戻るべき書物を一冊）を挙げるとすれば、今もそしてこれから も、アウグスティノス著『告白』を選ぶだろう。全部で 13 巻あり、前半部分はアウグス ティノスの自伝的内容が綴られ、後半部分では回心後の、彼の神への篤信が綴られて いる。
人生を暗中模索していたアウグスティノスが、「取って、読め」という言葉に導かれ 聖書を手に取って彼のその後の生き方を大きく変えたのと同様、私にとってはこの著 作がそのような存在である。
そこに記された「魂の深い省察」を読み取ることが出来るか否かで、今現在の自分が 如何様な状態にあるかが諭され、そこから未来の示唆を受ける一冊である。

小松　さくら　人間科学研究科

土屋賢二著　『われ笑う、ゆえにわれあり』

本書を公共の場で読むことをお勧めしない。私自身はうっかり大学の図書館で読んでしまい思わず吹き出して、周囲の人に白い目を向けられた。
本書の著者はお茶の水女子大学の哲学科の教授である。教授が書いた本というと難しい用語の羅列のような本を想像するが、本書は全く違う。日常のくだらないようなこと１つ１つを鋭い切り口と鮮やかな筆さばきで見事に笑いに変えている。例えば「助手との対話」「あなたも今日からワープロが好きになる」など。著者自身は大真面目に書いているのだろうから余計に笑える。
私は学部時代に著者の授業を受けたが、授業も彼の知性がにじむものであった(気がする)。退屈さを感じてきた頃などの絶妙なタイミングで笑いを誘う小話をするのである。しかし彼には笑わすつもりなど微塵もないのだ。
だまされたと思って本書を読むことをお勧めする。ただ残念なことに本書は女学院の図書館にはない。

中垣　美知代　人間科学研究科

ユージン・ジェンドリン、池見陽著　池見陽、村瀬孝雄訳
『セラピープロセスの小さな一歩』

私の院生生活は、本当に楽しく、本当に苦しい２年間でありましたが、そんな私の院生生活の側にはいつもこの本があったように感じます。この本は、ジェンドリンのいくつかの論文などがのっている専門書であり、実際、私自身の研究を進める上でも何度も開いた本です。しかし、私は、それ以外に、自分にとって何か大きな仕事をしようとしている時、人との関係に不安をもつ時、また、心が何かで満ち足りている時、そんな時に、何度もこの本を開きました。もしかしたら、後者のような時にこの本を開いた方が、回数的には多いかも？しれません。この本は、開く度に、いつも新しく、どこかのフレーズが、『今』の私の胸に響き、私のからだの中に染み渡り、本を開く前の私とは、すでに私の何かが違ってくるように感じられました。そういう意味では、この本は、私にとって、私の生きるプロセスの一歩踏み出す勇気をくれるような本であるといえるかもしれません。

羽手村　紗織　音楽研究科

モーツァルト作曲　『ドン・ジョヴァンニ』

“古典”という言葉を聞いて音楽学部生が思い浮かべるのは、“古典派”の作曲家（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）ではないでしょうか。その“古典派”作曲家の作品で、私が特に強い思い入れを持っているのは、モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》です。《ドン・ジョヴァンニ》 はモーツァルトの三大オペラの一つで、そのストーリーはドン・ファン神話を基に作られました。
私は大学院と平行してオペラ研修所へ通っていたのですが、そこで最初に取り組んだのが、このオペラのドンナ・アンナという役でした。　単語の意味を一つ一つ調べ、時代背景を知るため本を探し、何枚もの LD や CD を聴いて毎回の稽古に臨みました。何とかこの役を自分のレパートリーにしようと奮闘していた日々が、懐かしく思い出されます。
その後もいくつかのオペラを勉強させていただきましたが、《ドン・ジョヴァンニ》で学んだことは、今も私の音楽造りのベースとなっています。図書館には《ドン・ジョヴァンニ》の LD・CD、関連書物がたくさんあります。みなさんも一度ぜひ、このオペラを鑑賞してみてください。

矢野　梓　文学研究科比較文化学専攻

星野道夫著　『旅をする木』

―いわゆる古典ではないですが、何度も再読している本として選びました。星野道夫さんはアラスカで動物や自然を撮る写真家でした。自分よりはるかに大きく畏れるべき自然や、情報がない全くの静けさというようなものは、私の周りには物理的にないのですが、人は時にはそういうものを物理的にも精神的にも必要としているのではと感じていて、この本を読むことでそういう部分が少し満たされるような気がします。しかし近年は地球全体で環境が破壊されつつあって、アラスカの自然も変化していると聞きます。アラスカでなくともそれぞれの土地の自然の美しさがあってこその人、人のつくった物の美しさなのだろうと思うので、自然が崩されていくという危機は美しさの危機でもあるかもしれない、等と考えさせられます。

稲本　好美　総合文化学科

夏目漱石著　『こころ』

高校二年の冬頃、現代文の授業で夏目漱石の『こころ』を読んだ。その年の秋の終わりに父方の祖父の最期を看取り、「死」というものが非常に身近なものに感じられ、また敏感にもなっていた時期であったと思う。祖父が息を引き取った瞬間、私はどうしようもなく後悔した。まさに逝ってしまおうとしている祖父を目の当たりにして、人が「死ぬ」という事の本当の重さをやっとズシリと感じたのである。
作品中、気になった台詞には赤線を入れる。高校生の頃に入れた赤線は現在の赤線と同じだったりそうでなかったりする。『こころ』を読むたび、私は「自分」を省みるきっかけもらっている気がするのである。

谷　優似子　音楽学科

ローラ・インガルス・ワイルダー著　『大きな森の小さな家』

この本は、アメリカ西部開拓時代をたくましく生き抜いたインガルス一家の、はじめの物語です。
作者は一家の次女ローラ。この物語は、ローラ自身の体験をもとに書かれたものなのです。
小学校低学年の頃、クリスマスのプレゼントにもらったこの本を、私は何度も何度も読み返しました。
冬には雪に閉ざされる、そんな厳しい環境に囲まれながらも、助け合い暮らす家族･･･頼もしい父、優しい母、そして幼い娘たち。
子供心に、その家族の愛に心を奪われました。
えば、私の本好きの原点は、今でも時折読み返す、この本だったのだと思います。

西山　真未　総合文化学科

相田みつを著　『生きていてよかった』

「私の出会った不思議な本」

私にとっては原点ともいえる存在、それが次の作品である。
『生きていてよかった』(相田みつを著　角川文庫)という本だ。
この作品に私が出会ったきっかけは、高校時代の恩師から贈られたことだった。相田の数多くある作品集のなかでも、この本と私は出会った。
なぜだろうか、出会ってからたった数年ではあるものの、今になっては、随分何年も前から繰り返し読み続けている気持ちになる。そのようなまか不思議な本である。まるで運命のような出会い、私はこの本をふとしたときに読んでいる。
なかでも、印象に残っている作品に「つまづいたおかげで」(180)があげられる。
「つまづいたり　ころんだりしたおかげで　少しずつだが自分のことが　わかってきました。」「あやまちや失敗を　くり返したおかげで　人のことをいう資格のない　自分に気がつきました。」「そして　いざという時の　自分の弱さとだらしのなさが　よくよくわかってきました。」「だから　つまづくのもおかげさま　ころぶのもおかげさまです。」(同)とある。
ありきたりなフレーズ、それだけではない。相手と自分、失敗、感謝、そのそれぞれが伝わってくる。私はそう思う。読む人によって、どのようにも感じとることができる。自分でも分からない自分がいることに気づいたり、人は弱いもの、失敗はつきものだと実感したり。自分自身について悩む、こうしたお年頃だからこそいえるのかもしれないが。あるいは、このようなことを考えていた時期もあったと感じる人もいるのではないだろうか。何行かの繰り返しのなかに、心の奥深くを見出しているといえる。
この一冊に、私の愛する書、そして詩がぎゅっと込められている。繰り返し、繰り返し読むことで、読むたびに違って感じる。あるときは安堵したり、またあるときは感傷に浸ったり。悲しくもなれば、嬉しくもなる。きっと私が白髪になる頃、再び読んでみると、また違う思いをこの本から感じとることだろう。
一度手に取って、この本をパラパラとめくってみてほしい。次は一ページごとに隅々まで読み進めてみてほしい。すると、一度目も二度目も違った感情が芽生えてくる。なぜなら、この本がまか不思議な本だからだ。

山脇　野枝　英文学科

遠藤周作著　『沈黙』

　この小説と出会ったのは中学３年生、学習塾で国語の問題を解いていた時だ。遠藤周作の「沈黙」がテキストで引用されていたのである。短い引用だったが、私は生まれて初めて小説を読んで自分でも驚くほど感動した。高校生になり、文庫本を買いやっと物語を最後まで読み終えた。それから「沈黙」はいつも私のそばにある。自分が所属する大学の自治会新聞でエッセイの担当になった時、迷わず「沈黙」を紹介する一冊に選んだ。じっくり読み返したのだが、涙がとまらなかった。
江戸時代に日本を訪れた若い修道士･ロドリゴの宣教に対する情熱や葛藤と、キリスト教をひたむきに信じ、貧しい村々で暮らす農民のコントラストが克明に描かれており、彼らが困難を乗り越える姿は数年経っても心に響く。厳しく取り締まられていたキリシタン達を描くことで作者は、人間の弱さ、醜さを浮き彫りにしている。物語の終盤になると修道士・ロドリゴは寡黙な農民が持つ強さや美しさを発見するのだ。そして、本当の「沈黙」と彼は対峙する。
これから沢山の本と出会うだろう。しかし、私はきっとこの本を手放すことはないだろうし、たびたび読み返すと思う。騒がしい時間を離れ、「沈黙」の意味を考えるために。

＜わたしと図書館＞

劉　小珊　客員研究員

客員研究員として桜満開のすばらしい去年の４月に神戸女学院大学に来て、喜びと希望の満ちる新春を迎えるこのころに至って、あっという間に、1 年間の研究生活も残りわずかとなりました。研究に専念できたこの 1 年間を振り返ってみれば、私がよく行ったり来たりした所は、何よりも、神戸女学院大学の図書館だと思います。

私の専門分野は大航海時代、つまり 15 世紀から 17 世紀までの日中・日欧文化交流史の研究ですが、おかげで神戸女学院大学の図書館の豊富な資料を利用して、日本の文化歴史と日本語学に関する本を完成させ、論文を４本書き上げました。膨大な時間の集積としての歴史、それは過ぎ去った昔の出来事ではなく、現代社会のあり方を大きく規定していると言われます。やがて歴史の一部となってしまう現在を生きるわたしたちにとって、歴史をみつめる眼差しの深さは、現在の状況をより正確に知ることにつながっているのです。

この一年間、図書館の方々は、いろいろ協力してくださいました。資料の調べ方を熱心に教えてくれたり、本を探してもらったり、本学の図書館にない資料や書籍などを、「相互利用」という道を通して日本のあっちこっちから集めてくださって、いままでなかなか見つからなかった珍しい史料も手に入れました。ほんとうによかった、という感謝の気持ちで胸いっぱいです。

神戸女学院大学の図書館のおかげで、わたしは、この一年間、充実した毎日を送りました。論文を４本完成させた上に、学術交流にも参加できました。宮田先生のご要請で、「明末清初の『天』に対する中国と西洋の哲学思想の衝突」、「大きな視野で日中関係を見よう」という二つのテーマをめぐって、６月と 11 月に講演したことがあります。新しい情報技術〈IT〉の時代の到来は急速に人々の距離を縮めています。「地球村」という言葉はただ感覚的な意義の「世界がますます狭くなっている」というのではなく、人類が共生共存という全体的な意識を持ち始めているということを意味しています。近・現代になってから、東洋人は西洋文化の影響を多く受けていますが、東洋人の価値観が最終的に求めるのは、人間と自然との調和と共存です。一歩つっこんで言うと、東洋人の考え方と価値観は農耕文化から生まれたのです。こうした農耕文化が西洋の遊牧文化に比べ、最大の違いは、農耕文化が個人の権利と義務の統一を実現しているのに対し、西洋文化は個性と個人の権利を強調しているということです。日本は近代に西洋から受けた影響が大きいですが、本質から見れば、西側の資本主義国とはやはり違います。この意味から言えば、日中間で意思疎通できるところはまだまだ多いと言えるでしょう。日中間にはまた儒家思想という共通点

もあります。儒学の、人間と人間、人間と社会の調和と共存を強調し、教育や現実世界を重視するという思想が中日両国とアジアの国々に普遍的に存在していると思います。

３月末に中国に帰国し、忙しい毎日に戻るのですが、今回の滞在で集めた豊富な資料を利用して、研究を続けていこうと思っています。

＜研究室から＞

プラトンを読む愉しみ

高橋　雅人　文学部総合文化学科助教授

史上、どの哲学者が一番優れているかと問うことは愚かしく非生産的なことだろうが、しかしどの哲学者が一番好きですか、と問うことは十分意味のあることだろう。私の場合、その答はプラトンということになる。ではその魅力はどこにあるかと言えば、真実を抉る筆致の鋭さ、自由闊達な文体、余裕のある真剣さ、そして完璧な構成ということになるだろうか。

例えば、『メノン』と題される対話篇を取り上げてみよう。登場人物は２０歳前後の裕福な青年メノン、メノンの奴隷の少年、ソクラテスを訴えることになるアニュトス、そしてソクラテスである。メノンが「徳は教えられるか」と問うことによってこの対話篇は始まる（この問いはつまり「立派な人を教育することができるか」という問いである）。紆余曲折を経て結論は「わからない」である。何だか肩すかしの結末だが、そこに至るまでの紆余曲折にこそ味わうべきことがたくさんある。

「徳は何であるか」を前もって知っていなければ「徳は教えられるか」という問いに答えることはできないとソクラテスは執拗にメノンに教える。その執拗さにめげて、メノンは、知っていることは探求しないし知らないことは探求のしようがない、だから探求は不可能であるという論陣を張る。それに対して、いや探求は可能だ、なぜなら学ぶことは想起に他ならないからという有名な想起説が初めて語られるのがこの『メノン』である。
ところが「徳は教えられる」と結論が出たとたんに、「徳の教師」に出会ったことがないから（これはつまり立派な人を教育した人にも、教育している人にも出会ったことがない、ということである）、実は教えられないのではとソクラテス自身が疑問を提出する。この突然の急ブレーキもまた味わうべきだろう。そしてこの疑問を解決するために、ソクラテスはアニュトスに問うことになる。徳の教師であることを公言しているソフィストという人たちがいるが彼らは徳の教師だと思うか。アニュトスはそれを真っ向から否定する。否定するだけではなく、ソフィストが有用な人物であるかのように語るソクラテスに対して怒りと憎しみを露にし、対話の舞台から去る・・・。

結局ソクラテスのしたことは何だったのだろうか。「徳は教えられるか」という問いば

かりか、「徳とは何であるか」という問いにも答えられず、メノンをしらけさせ、アニュトスを激怒させ、自分の死を招いただけに見える。だが私たちはソクラテスが想起説を示した相手が奴隷の少年であったことを忘れてはいけないだろう。奴隷の子の内に精神を認めたソクラテスが美事なのだ。どのような人であれ人を人として扱うためには勇気・節制・正義・思慮が必要である。社会においてさげすまれている人を人として扱うことは時として自らに危険を招く。その危険を恐れぬ勇気が必要である。社会において褒めそやされている人を褒めるのはしばしば自らの内に欲望を、その人に気に入られたいという欲望を宿している。その欲望を抑える節制が必要である。自分を含めてどのような人をも神や猿として扱うことをせず、同じ人として扱うこと、これこそ正義でなくて何であろう。人を人として扱うとは精神同士の真正な出会いなしにはありえない。その出会いを可能にするには思慮が必要である。

奴隷の少年がその後、どのような生涯を送ったか何も知る手がかりは私たちには残されていない。しかし、少年がソクラテスとの対話を通じて何も学んでいなかったならば、「徳は教えられない」ということになりそうである。

少年は何かを教わっただろうか。興味のある方はぜひとも『メノン』を手に取って読むことをお勧めする。

＜お薦めサイト紹介＞

櫻木　幸子　文学部リサーチルーム

★英辞郎 on the Web　http://www.alc.co.jp/index.html
★Wordsmyth　http://www.wordsmyth.net/
★Googlefight　http://www.googlefight.com/
英文を書くときに便利なサイト。
「英辞郎」は英和・和英辞書。２単語以上入れて慣用句を探したり、レター用語（頭語や結語など）を探すなど、便利な使い方もできる（「更新情報・利用規約・使い方」を参照のこと）。例文が多いので慣用表現を見つけやすい。
「Wordsmyth」は英英辞書 兼 類義語辞典（シソーラス）。ついつい使い慣れた語を繰り返してしまうので、シソーラスに助けてもらうことも多い。
「Googlefight」は、Web 上で２つの単語を比べてどちらが多用されているか調べることができる。日本語には対応していない。

★nifty の翻訳　http://tool.nifty.com/globalgate/
★ STUDIO KAMADA の 翻訳サイトリンク集 http://homepage2.nifty.com/m_kamada/l_translation.htm
翻訳サイトは基本的に「直訳」なので、レポート作成の英訳ツールとしては使い物にならないが、URL 翻訳でサイトの概要を理解したり、自分が書いた英文の単純ミスをチェックしたりするには便利。「書く」には力不足だが「読む」には使える、というところか。

★Whois Source　http://whois.domaintools.com/
★aguse.net　http://www.aguse.net/
ネット上で見つけた URL、メールアドレスの発信元、もしくはアクセスログで得られたサイトやドメインについて、実際にブラウザで開く前に情報を得たいとき、ドメインに関する基本情報はもちろん、サイトの詳細情報や周辺情報を提供してくれるサービス。
（詳しくは 2/7 の Yahoo ニュースを魚拓したので、そちらで確認を。）
http://megalodon.jp/?url=http://headlines.yahoo.co.jp/hl%3fa%3d20070207-00000028-zdn_b-sci&date=20070207133312

＜ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション （7）
作中人物への鍵――その３（『コニングズビー』に関して）＞

松村　昌家　大手前大学大学院教授

「批評家同士」(パンチ 1870 年５月 14 日号、P.193) Critics

作中人物への「鍵」を語るからには、当然主人公からはじめなければならないのだが、実はこれについては多少の迷いが伴った。というのは、前回に紹介した H.P. メンディスの『ビーコンズフィールド伯爵』には、コニングズビーのモデルとしてリトルトン卿（Lord Littleton）があげられているのに対して、1844 年版の小冊子「『コニングズビー』における作中人物への鍵」には、リンカーン卿があがっているからである。

ただし、これには、Mr. Smythe という修正加筆がなされている。そもそもリトルトン卿やリンカーン卿がどうして候補にあげられたのかは不明だが、スマイズならすんなりと入っていける。

ディズレイリの評伝として最も信頼できるロバート・ブレイクの『ディズレイリ』（初版 1966）には、「コニングズビーは、まさにスマイズ」（第８章）と断定されていて、リトルトンも、リンカーンも全く問題にされていないのである。

George Smythe （1818−57）は、作中のヘンリー・シドニー卿の「鍵」になっているジョン・マナーズ卿とともに、青年イングランド派の主要メンバーの一人で、イートンからケンブリッジに進み、若い知的貴族集団を結成して、現実ばなれした空想のトーリー主義の復活を夢に描いた。バイロンを英雄視し、放蕩三昧なところがあって、あまたの女性をなびかせていながら、死の数週間前に大金持ちの女相続人とリスペクタフルな結婚

をして親孝行をつくしたことや、1852 年にイングランドにおける最後の決闘をしたことなどで、話題を呼んだ人物である。

もちろんコニングズビーは、スマイズの性格をそのまま代表しているわけではない。大いに共感的に美化されているところがある。しかし、コニングズビーの中における直情的・衝動的な気質は、紛れもなくスマイズから受け継いだものである。

興味深いのは、コニングズビーと緊密な友情の絆で結ばれるオズワルド・ミルバンクが、ヴィクトリア朝後期において最も際立った大物政治家の一人として名高い W.E. グラッドストン（1809－98）をモデルとして造型されているということだ。

グラッドストンは、リヴァプールの富豪商人の家庭に生まれ、イートンからオックスフォードへ進学し、クライスト・チャーチで学んだ。1832 年、23 歳で国会議員に初当選してから着々と実績を積み、1868 年から 74 年、1880 年から 85 年、1886 年 2 月から 8 月、1892 年から 94 年と、4 回にわたって首相をつとめた。

グラッドストンは、『コニングズビー』の作者ディズレイリ（1804－1881）と同時代人であると同時に、自由党のリーダーとして、保守党首のディズレイリの政敵であった。ちなみに、ディズレイリは 1868 年ダービー卿引退のあと 2 月から 12 月にかけてと、1874 年から 80 年までの 2 回首相の座についている。

ディズレイリとグラッドストンは政敵であったばかりでなく、著作の面でもはり合っていた。1869 年にグラッドストンの Juventus Mundi（英雄たちの世界）が、そして 1870 年にディズレイリの『ロウセイア』が相次いで出版されたときに、『パンチ』は「批評家同士」という題で、実に巧妙に両者のライバル関係を描きあらわした。（5 月 14 日号、P.193 ）

『コニングズビー』が書かれた頃、グラッドストンは 34 歳で商務院総裁として、閣僚の一員になっていた。そんな彼を、リヴァプールの商人の子ではなく、コニングズビーが「現代における最大の驚異の都市」と見るマンチェスターの大工場主（ミスター・ミルバンク）の息子に仕立てた。そして前回に述べたように、イートン校在学中のコニングズビーが、オズワルド・ミルバンクの命を救った恩人となり、旧貴族と新興の富との結合のドラマが展開されるようになるのである。

『コニングズビー』において、主人公の人格形成の点から見れば、バロン・ライオネル・ロスチャイルドをモデルにして描かれたシドーニアをより重視すべきだろうが、
人物としての興味の観点から、ここではモンマス侯爵にまず焦点を当てておきたい。

モンマス侯は、守旧思想の固まりで「新世代」を代表するコニングズビーからの挑戦を受ける立場におかれているが、その傲慢と頑固さには、伝統的な貴族の威厳と風格とを感じさせる側面があって、キャラクターとして際立っている。

モンマス侯が、サッカリーの『虚栄の市』（1848）における老放蕩貴族ステイン侯爵とともに、第 3 代ハーフォード侯爵をモデルとして成り立った人物であることは、すでに定説化していることだが、そのハーフォード侯爵とは、どういう人物であったのか。そして彼とディズレイリとのあいだには、どのような関係があったのか。（つづく）

＜史料室から　―史料と資料―　＞

佐伯　裕加恵　史料室職員

神戸女学院史料室は「史料」という字を使っています。よく「資料室」と書かれたりしますが、この違い、おわかりになりますか。

資料は英語で言えば material、何かをするために参考にしたり、用いたりする物全般を指しています。レポートを書くために参考にする本も、値段の比較をするために見るチラシでも、立派な資料です。図書館では書籍のことを図書館資料ということもあります。

では、史料のほうはどうかというと、英語で言えば archive(s)。ちょっと聞きなれない言葉ですね。最近では NHK のテレビ番組で、NHK アーカイヴズというのがあって、ご覧になったことがあるかもしれませんが、簡単に言ってしまえば、歴史的な資料のことを指します。アーカイヴというのは歴史的記録のことで、それが集まったものがアーカイヴズです。図書館ほど有名ではありませんが、全国には史料を専門に扱っている公文書館や文書館があります。ここでは、いわゆる行政文書や町の歴史などが調べられます。

さて、史料室は「史料」の文字を使っていますから、主に扱っているものは歴史文書です。神戸女学院の史料室ですから、神戸女学院の歴史を調べることができます。他の大学にも史料室（館）や資料室（館）があって、使っている文字は違っていてもしていることはおおむね同じと思っていただいて差し支えありません。

神戸女学院は 130 年以上の歴史を持つ女子の学校です。日本国内では古い学校の一つに数えられています。神戸女学院はキリスト教の学校です。戦時中もその教育を維持してきました。そうした歴史を物語る数々の史料が学校には残されているのです。130 年分の史料、これらは偶然残ったわけではありません。その時々に大切な史料を残そうという人々の努力があり、後世のために史料を守ってきた人々がいます。

学校の歴史に興味を持たれた方は史料室をのぞいてください。史料や資料たちと共に歴史の海に漕ぎ出してみませんか。

＜図書館活動記録＞

●図書館では 2006 年度に本館閲覧室におきまして以下のとおり展示を致しました。

- 2006 年 ４月 ３日（月）～　９月 29 日（金）
  「神戸女学院の歴史」―創立から現在まで―
- 2006 年 10 月 ７日（土），10 月 10 日（火）～ 10 月 27 日（金）
  「音楽図書室資料から見る 100 年」　音楽学部創設 100 周年記念展示
- 2006 年 11 月 13 日（月）～ 11 月 24 日（金）
  「ディズレイリ・コレクション展」
- 2006 年 11 月 18 日（土），12 月 １日（金）～ 12 月 22 日（金）
  「聖書の世界」　クリスマス特別展示
- 2007 年 １月 11 日（木）～　１月 26 日（金）
  「絵巻の世界」

他に、日本賛美歌学会第 6 回大会記念として、「オルチン文庫」と「松山文庫」より明治初期讃美歌を、またオープンキャンパスでは、キリシタン禁止令の高札や神戸の旧外国人居留地パノラマ写真などを展示しました。